

經濟論叢

第十卷 第六號

- フランス古典経済学の系譜……………河野健二 1
- 貨幣需給の投資乗数効果に与える影響
……………石川常雄 21
- ウィリアム・タムソンの経済思想
……………鎌田武治 39
- 英国労働組合の機構と形態……………与田 柁 55
- 經濟論叢 第七十九卷・第八十卷総目録
-

昭和三十三年十二月

京都大學經濟學會

ウィリヤム・タムスの経済思想

——リカードオ派社会主義者の研究(二)——

鎌 田 武 治

序

前稿では功利主義を基調としたタムスの社会改良思想を考察してきた。いふなれば道徳的・政治的影響という点から富の分配を研究してきたのである。しかしタムスのいわゆる『社会科学』を理解するためにはさらに富を産業および再生産に対するその影響から研究すること、いいかえれば『社会科学』のもう一つの重要な構成要素である経済理論をつけ加えなければならぬ。本稿の課題はタムスの経済思想を考察し、あわせて社会改良思想と経済思想とが功利主義を介してどのような『社会科学』体系を形成しているかを究明することである。

一

タムスは『社会科学』の主要題目として幸福をとりあげている。それゆえに彼の研究対象は富の単なる所有、もしくは富の量ではなくて、富の正しい分配である。富の『正しい』分配とはすでに倫理的色調を帯びており、価値

判断を前提している。だから彼にあっては分配の理想的——彼岸の様式は説かれていたが、現実的——此岸の様式の分析は理想社会の優越性を強調するためになされていくにすぎない。現実の分配様式は力またはサギによる不平等なそれであって、幾多の害悪をはらみ、かつ生みだしているのである——彼はこう前提して現在の分配制度の不正義と理想社会のその正当性とを立証する手段として経済理論を援用する。

さて分配さるべき富とは彼によれば「労働によって生産された欲求の対象」のことである。空気が水のように自然の手だけによって生産された物、すなわち物の効用だけでは富は形成されない。さらに労働がその物に附加されなければならぬ。労働は富の唯一の父なのである。富となるためには、「欲求の対象」であると同時に「労働によって得られる」という二つの条件が必要とされる。従ってタムスのいう富とは労働と使用価値との統一体である。しかしながら交換価値そのものは富の本質的属性ではない。「交換価値 value in exchange は、たとえそれが大体いつでも富の觀念につきまとうとはいえ、富の觀念に必然的なものではない。なぜなら小共同社会ケムニタチは何ら交換をせずに共同の労働によって富み、かつ幸福だからである」(“Inquiry”, p. 6)と彼はいつている。ここでいう富は労働生産物一般を指している。だが現実には交換は生産にとって必要不可欠であるから、彼の分析の対象とする富は価値と使用価値の統一体としての商品なのである。それゆえ彼は「労働こそ富の価値の唯一の尺度である」(“Inquiry”, p. 15)と規定する。

(1) “Inquiry”, p. 6. (2) Ibid., p. 9.

さらに富の価値を生産する労働とは、通常の判断をもって欲求の対象に働きかけられた労働であり、社会の通常労働、つまり社会の普通の職業における普通の技術と勤勉とをもった労働のことである。すなわち社会的平均労働

を意味する。

(1) "Inquiry," pp. 15-16, 526, 532.

しかし労働生産物でなくとも富となるもの、すなわち価値をもつものもある。たとえば砂漠における泉水の価値と建築用地の価値とがこれである。これらの価値はそれぞれづぎのようにして規定される。

まず砂漠における泉水の価値について、——「炎暑の砂漠地方では泉水は富の源泉であるが、土地は何人の財産でもなく私有にともなう労苦に値いしないものである。自然が泉水をつくりと考えると考えられるから、泉水をつくるのに労働は必要でない。また水を汲む労働もそれだけでは評価されない。しかしその地点における泉水の存在は、もしそれがなかったならば最も近い水の供給地から水を運ぶために必要であろうと思われる労働を省く。そしてこの泉水の価値はこのようにして省かれた労働の量によって測定することができる。」("Inquiry" p. 9)

つぎに建築用地の価値、——通常の土地の価値はその上に投下された労働量によって決定されるが、建築用地の価値は「運搬その他の点でその土地の位置によって省かれる労働量および位置によって得られる売行き¹⁾の速さ、あるいは賃貸の蓋然性によって省かれる労働量によって決定される。」("Inquiry" p. 14)

これら二つの場合、価値は有利な位置による免省労働によって規定される。もともと投下労働価値論に従えば労働生産物以外は価値をもつことができない筈である。以上は価値をもたずに価格だけをもつ例であるにもかかわらず、価値と価格との混同から労働価値論の拡張適用をあえてする結果になった。この混同による破たんはつぎの遊園地 Pleasure-ground の「価格」に表面化する。遊園地の価格だけは投下労働にしろ免省労働にしろ、労働による価値規定を受けない。その価格は富者の欲望の競争によって左右される、と彼は考える。それによって遊園地は他

の用途の土地の「価値」以上にさらに剰余価値 surplus-value をもつ。この剰余価値は価値の実体をとまわらないから人為的価値 artificial value とも呼ばれる。だから遊園地の価格は独占価格であり、タムソンも遊園地だけに「value」を避けて「price」を使っている。彼はつぎのように述べている。

「もし農業地を創造するよりもやや多くの労働が遊園地を欲求する気まぐれにも等しく適した新しい土地を創造しうるならば、この労働の量が価値を決定するであろう。しかし人の好みに合ったこれらの遊園地は一般に量に制限があり、労働によって模造できないものである。だからそれらの土地は必然的に制限された供給のために、多かれ少なかれ合理的な欲望の競争から生ずるところのその土地自体の剰余価値 surplus-value をもつ。しかし農業上の価値、もしくは建築上の価値を超えた剰余、あるいは保養のため、もしくは労働によって評価される他の有用な目的のための価値を超えた剰余は富の自然的な、無制約な、最も有用な分配が行われるところでは殆んど生まれなしか、あるいは……非常に少ない程度にしか生じない。この剰余はいかなる社会の富と幸福の尺度でも評価しえないか、あるいは評価するに値いしないところの人為的価値 artificial value にすぎない。」(“Inquiry” p. 14)

(1) 平瀬己之吉「経済学の古典と近代」一一二五頁参照。

ここでいわゆる剰余価値は、自然的稀少性にもとづく独占価格から生ずる超過利潤としての意味で用いられているのであって、剰余労働によって創造される剰余価値のことではない。¹⁾ タムソンの剰余価値概念はマルクスのそれのように生産視点からとらえられたものではなくて、流通視点からとらえられたものである。

(1) 平瀬己之吉「古典経済学の解体と発展」一一二頁参照。

右の例外を除いては労働が富の価値の唯一の尺度ではあるけれど、富となるためには欲求の対象であることも必

要である。彼のいうところによれば、欲求と好みは一定不変ではなく肉体的条件と精神的条件とに従って、とくに知識水準すなわち科学と技術の水準に従って変化する。また労働そのものも社会的通常労働のことであり、技術の熟練、危険、悪臭、有毒な空気、湿気、寒気および特別の重労働や人の嫌う労苦のような特別の条件の下にある労働の価値は増加し、その報酬はふえる。それゆえ労働は富の価値の唯一の尺度ではあるけれども決して正確な尺度とはいえないのである。

(1) "Inquiry," p. 15. (2) Ibid, p. 16. "Labor Rewarded," p. 31.

さて前者の例についていえば、需要の変動によって影響を受けるのは価値でなくて価格である。価値を論ずる場合には需要を一応捨象してなさるべきであらう。価値と価格との混同。後者については、価値の決定そのものが社会的平均労働量によるのであって、このことは個別商品が含む労働量とその価値とは必ずしも一致しないことを前提している。価値の決定は個別商品の存在を条件としているが、それを越えた社会的操作である。価値尺度論の古典学派的誤謬の再現。

二

タムソンは生産要素を労働と資本とに区別する。労働とは筋肉の力と技術である。資本には蓄積された労働生産物すなわち材料、道具、機械および土地などの労働手段と労働対象、つまり生産手段が含まれる。労働によって生産される価値についてはすでに述べた。しかし生産は労働のみでは行われない。必ず生産手段すなわち『資本』が介在する。そこで『資本』の価値移転について彼はこういつている、――

「資本の使用から生まれる価値の二つの尺度がここで示される。すなわち労働者の尺度と資本家の尺度とがこれである。労働者の尺度はこの資本の消耗と価値とを資本が磨滅する時までに償却すると考えられる金額に、さらにその資本の所有者兼監督に対してヨリ活動的に雇用されている生産的労働者と等しい安楽な生活が送れるような補償を追加した金額である。他方、資本家の尺度は機械あるいはその他の資本の使用の結果、同一労働量によって生産された価値の増加分 additional value である。すなわち資本家の資本もしくは資本の使用を蓄積し、労働者に前貸しすることについての資本家の優れた知能と技術のために資本家によって享受さるべき剰余価値の全体である。」(“Inquiry,” p. 167)

(1) “Inquiry,” pp. 167, 167, 422.

つまり労働者の尺度によれば資本の使用から生ずる価値は不変資本の価値プラス利潤である。もとより監督賃銀の形をとってはいるが利潤の正当性をみとめた例としてタムスの自家撞着を非難される箇所である。資本家の尺度によるそれは『剰余価値』である。この剰余価値はいうまでもなくマルクスの概念による剰余価値ではない。しかし、すでにみた“*Inquiry*”一四頁のそれとも内容がちがう。ここでは有利な生産条件もしくは生産組織から生ずる超過利潤を指し、技術的条件の差異に帰因するものである。すなわちタムスは『剰余価値』を一般に超過利潤の意味に使用している。従ってアントン・メンガーがマルクスやロットベルトウスの表現様式や思考過程をタムスに見出して彼らを盗人呼ばわりするのは誤解もはなはだし²⁾。

(1) 平瀬己之吉「古典経済学の解体と発展」一一二頁。

(2) Anton Menger: *Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag*, 3. Aufl., (1904) Vorrede, S. iv, u. s. 55—6. 剰余価値の表現

様式でなく、その概念自体に關していへば、タムスン以前にすでにホール、リカアドオに看取できるのであつて問題はその言葉や概念でなくて、その体系的把握である。ディールは剰余価値についてマルクスは科学的・経済学的基礎づけによつて客観的に不払労働として説いたが、タムスは主観的に正義感から不正な控除として理解している、と両者の剰余価値概念の相異を挙げてメンガーがタムスを過大評価した点を批判している。Karl Diehl: *Über Sozialismus, Kommunismus und Anarchismus*, 5 Aufl. (1923) S. 256.

しかしディールのタムスン解釈の誤謬はあらためて指摘するまでもないであろう。タムスンの剰余価値は超過利潤を意味するもので、その限りでは主観的どころか、ハスバッハの評する如く価値判断から自由なのである。Marie Hasbach: *op. cit.* S. 182.

超過利潤はもとより利潤さえも『資本』の使用から生ずる『価値』ではない。資本利潤を承認することは労働価値論から背離することである現象の皮相的・俗流的把握にはかならない。この俗流の見解がタムスンの経済理論をして矛盾のつぼと化し、彼の社会改良思想と無縁のものたらしめる危険をはらんでいるのであるが、それはともかく、彼に従つてこれから二つの価値尺度の功罪を比較しよう。

まず労働者の尺度が用いられた場合どのような結果になるであろうか？——眞の幸福という点からみれば労働者と資本家の境遇は等しく改善されるであろう。その上、ただ虚栄と栄達のみを夢みる蓄積動機は姿を消し、それと反対に労働をいつそう生産的にするために必要な蓄積に対する刺激がますます強くなる。「年々、人間労働が機械その他によつていつそう生産的になるにつれて労働の報酬は増加し、住宅、機械、衣服、食物は少数の資本家のためではなくて、全体のために改善されるであろう。……分配の平等から生ずることが証明されたところのすべての幸福の増進がゆきわたるであろう。そしてひとびとは富から生ずべき絶対的安楽のために生産するのであつて、たんなる相対的安楽、すなわち同胞のみじめさと自分の優越との比較のために生産することはないであろう。」(「In-

quiry," p. 170)

反対に資本家の尺度が用いられたときはどうであろうか？——蓄積された富はすべて少数者の手に集積される。あらゆる生産手段を奪われた生産的労働者は生活賃銀に切下げられ、欠乏と生存の必要から労働を強いられる。他方においては少数者の極端な奢侈と華美とが流行する。不平等の害悪が極度にまんえんする。

(1) "Inquiry" p. 171.

右にみたところによれば、労働者の尺度においては資本利潤が忘れられて、「平等な安全」の制度にすりかえられ、資本家の尺度においては『剰余価値』は相対的剰余価値におきかえられて、「力による偽りの安全」の制度が抬頭する。それゆえ資本家の尺度は弊害が多くて、もし徹底的に適用されるならば生産そのものをも破壊してしまうと考えられているのにひきかえて、労働者の尺度こそタムソンの希求するところとなるのである。しかし労働の尺度は知識と正義が全般的に普及しなければ行われぬ。現実には利害関係の対立やその他の偶発的条件によって、この両者の中間の尺度が使用されている。とはいえ現実には済度し難いものではない。不安全もしくは不平等を生みだす「力とサギが富の増進につれて除去されてゆき、それと共に労働者の尺度に向ってゆく傾向があらわれる。」("Inquiry," p. 171)と彼は理想への接近を楽観している。ともあれ資本価値と利潤とは古典派価値論のつまずきの石であった。タムソンにとっても例外ではない。しかしここではこの関係を追求するのを一応打切つてさらにつきへ進もう。

三

「資本利潤が高ければ高いほど——他の事情が同一ならば——労働の賃銀はそれだけ低くならなければならな

5.」(“Inquiry” p. 241)と云う賃銀と利潤の相反關係は、労働價值論をとるものがすべて説くところである。それでは利潤あるいは賃銀はどの点で決定されるか、をタムスンに問かう。

資本利潤を規制する競争に二種類ある、すなわち大資本家の間の競争、および独立小生産者全体と大資本家との競争がこれである。後者は『分配の自然法則』のもとで有益な影響力をもつに至るもので、『分配の自然法則』の實現した社会では独立小生産者が全資本の九割を所有するから、残りの資本を所有する少数の大資本家は独立小生産者の報酬にマッチした公正な報酬を彼らが雇っている労働者に支払わなければならぬ。だが現在おこなわれている競争は前者すなわち大資本家間の競争である。大資本家は自分の資本からできるだけ多くの利潤を得ようとのぞみ、この目的のためあるいは彼らのあいだで利潤を協定し、あるいはできるかぎりの手段で労賃を切り下げようとする。しかし利潤の協定は自由競争のもとではいつも失敗する。すなわち利潤があまり騰貴すると需要が減退する。そして比較的弱少な資本家は彼らの取引の減少によつて損失を蒙るので、他の資本家よりも安売りをする。こうして利潤は需要に見合う点まで引き下げられる。飽くことを知らぬ利潤の追求は需要の減少—商品価格の下落を招き利潤の増大そのものを制約するというジレンマに陥る。またもし利潤が高く、しかも需要が大であるならば、新しい競争者が登場して供給を増大し、利潤は平均の水準にまで下がるであらう。

(1) “Inquiry” pp. 246-7.

このようにして自由競争の下では利潤率の平均化が表現する。だから大資本家たちは利潤率の平均化の傾向を阻止するために団結して競争を排除しようと考ええる。しかし「大衆の利益に反するような団結は失敗するので、資本家たちは生産的労働者に反対して団結するのを援助するように大衆をなだめさそうと懸命になる。財貨の価格は、

もし賃銀が切り下げられなければ大衆にとってペラボーに騰貴するにちがいない、と彼らはいう。〔“Inquiry,” p. 247〕だが、この呼びかけに大衆は応じない。なぜなら彼等は生産者であり消費者でもあるから、労働の報酬が低下するのは彼らにとって利益ではないからである。これに応ずるのは社会の労働に寄食している少数の有力者である。彼ら有力者たちは自分の地位を利用して、法律を以て資本家の利益を擁護する。この結果、労働生産物は労働者を生かすせておくのに必要な量を除いてすべて資本家と有力者とによって消費されるようになる。

(1) 「競争は同じような条件にあるすべての商工業を利潤の平等にまで引き下げるであろう。」〔“Inquiry,” p. 120〕

(2) *Ibid.*, pp. 246-7, 318. なお従来第三種の競争として労働者間の競争が数えられ、その競争によって労働者の賃銀が彼らの生存に必要な最低限におし下げられる、といわれているが、これは歴史上の事実にも照合しても誤りである、とタムソンは主張している。cf. *Ibid.*, pp. 247-8.

大資本家の独占的団結が賃銀切下げの所期の目的を達しうるのに反して、労働者の団結、すなわち労働組合は賃金引上げにどの程度の力をもっているであろうか。タムソンによれば、個人的競争の社会における単なる賃銀値上げのための労働者の団結は、資本家に平均利潤を許す限度内での賃銀率を要求するにとどまる。このような団結の利益は好況期にかぎられていて、景気が後退すると直ちに団結の威力を失うから、労働組合に多くを期待できない。彼にあっては労働組合はただ協同組合の設立基金を蓄積する手段としてのみ存在理由をみとめられているにすぎない。²⁾

(1) “Labor Rewarded,” pp. 75, 78. タムソンは“*Inquiry*”に於いては労働組合について論じている。 “Labor Rewarded”においてその意義が論じられているのは、労働組合に重要性をみとめるホジスキンの“*Labour Defended*” (1825)の批判として本書が草されているからである。

(2) *Ibid.*, p. 88.

こうして大資本家は自由競争を排除するために団結し、資本家階級と労働者階級とは対立する。だが安全を重視するタムスンにとって、実力行使は不正義を招くものとして採るところでない。現実の社会から理想社会への発展の必然性は説かれていない。あるいは自由意志による選択のみである。彼はまず『分配の自然法則』の確立を提唱する。ところで労働価値論に立脚した正義の要求「各人に彼の全労働生産物を確保すべし」は元来個人主義的な権利であって、独立小生産者の観念である。分業を前提とした結合労働が支配的な労働様式である社会では、個々の生産者に彼らの労働の全生産物を与えるということはできない相談である。しかし彼は「個人的になしえないことも集団的になしうる」ことを確信して、のちに集団主義への帰依を表明する。

(1) "Labor Rewarded," p. 37.

四

これまで個人的競争制度の社会について考察してきたのであるが、協同組合社会においてはどうかであろうか。ここでは原則として組合員はみな生産的労働者でなければならぬ。生産的労働者とは少くとも自分が消費した量のだけの交換価値をもつ物を直接もしくは間接に再生産する労働者のことである。

(1) "Inquiry," p. 202. ただし彼は、物的富を生産しない精神的労働者も一般的幸福の増進に貢献するという理由で、精神労働に支払われる報酬の正当性を論ずる。従って生産的労働のみが報酬を受ける権利をもつものでなくて、一般的幸福を増すか否かが報酬の正当性を定める規準になる。(cf. "Labor Rewarded," pp. 2-3)

そこには資本家はいない。共同社会における資本とは必要労働手段もしくは享樂のための労働生産物を意味する。収入を得るための資本は決して存任しない。そして資本の蓄積は大衆の貯蓄によって行われる。タムスはオウエーンと同じように各地域に協同組合を設立し、漸次に全国に普及させようという考えなので、協同組合の間での生産物の交換が当然問題になる。各協同組合がその余剰生産物を交換する場合には労働対労働の正当な等価で行われる。組合の数が少ない間は物々交換が支的であるが、組合が多数の際は全成員に必要な各財貨が各組合ごと一括して交換される。しかし交換において、労働は価値の唯一の尺度であつても必ずしも正確な尺度ではない。だから彼はつぎのように附言することを忘れない。「もし正確な評価がみあたらないならば、その商品によって表わされていると考えられる労働量が交換されるよう、両当事者の納得のゆくように相互の善良な信頼によって取極めが行われるであろう。」(“Inquiry”, p. 526)と。なお各協同組合の土地の肥沃度の差異にもとづく土地生産物の生産高の相異、すなわち差額地代は地代land rentという名目でそれぞれの協同組合によってその全国的連合体に納められ、全国的企業の運営と外敵からの防衛のために使用される。

(1) “Inquiry”, p. 524 et seq.

(2) Ibid, p. 577 et seq.

不平等の支配する自由競争社会に対する、平等な共同社会の優越性を説きつつ、タムスは両社会制度の択一を個人の自由意志に委ねる。彼によれば社会の害悪は分配の不平等という人為的制度に源を發しているのであつて是正しうるものである。その方法は前稿ですべて述べた。最後に社会の害悪を人間の自然的性向に帰因させて、社会改良の努力に反対する有力な理論『人口法則』に關する彼の見解を考察しよう。

彼によれば、人間の天性には確かに自分の種族を食物の量よりも急速に増殖せしめる性向がある。しかし人口過剰を知識の普及によってコントロールし、生理的欲求を理性によって規制することは可能である。歴史的事実があたかも人口法則の妥当性を立証しているかのように見えるのは、あきらかに大衆の思慮分別の欠如を物語っているもので、人口過剰から生ずる害悪は慢性不治のものではない、とマルサスの人口原理の自然法則性を否定する。¹⁾

(1) "Inquiry," p. 535 et seq.

これまでタムスンの社会経済思想について関説したところから、「彼はリカアドョの賃銀基金説とマルサスの人口原理とをうけいれる功利主義者と袂別し、レッセ・フェールに対するベンサム的確信を放棄し、ロバート・オウエンの名を連想させる集団主義コレクティヴィズムを擁護して功利主義の議論を發展せしめることに着手した、¹⁾」ということができる。こうして彼は古典派経済学の解体に一石を投じたのである。

(1) Pankhurst op. cit. p. 20.

五 結 び

タムスンは最大多数の最大幸福を窮極的目標とする功利の原理を基調として『社会科学』の体系を樹立しようとした。¹⁾ 『社会科学』は大別して道徳的・政治的分野と経済的分野とから成っている。前者は協同組合主義として、また後者は経済理論として説かれる。もとよりタムスンは叙述をこの二つに分割して進めているわけではない。本稿は行論の都合上、二つに分けて整理したにすぎない。今やわれわれにはこの二つを統一して体系として把握する課題が残されている。

(1) すでに前稿で述べたように、タムソンは効用通減の法則を適用することによって最大多数の最大幸福は分配が平等におこなわれた時に実現することを示した。そして平等とは彼にしたがえば労働者に彼の労働の全生産物を与えることなのである。ここに平等を媒介として功利主義と労働価値論との接合をみることが出来る。もとより功利主義にとって平等以上に安全が重要な要素である。こうしてさらに、

労働価値論↓平等

+

功利主義↓協同組合主義

の図表がえられ、以下に論ずるように経済思想と社会改良思想とを統一する中心として功利主義が重要な意義をもつてくる。

彼の経済理論は労働価値論をもつて全内容とするのであるが、労働価値論そのものは「各労働者に彼の全労働生産物を確保せよ」という平等——タムソンはこれを平等という——の権利を正当化するための論理的手段である。この平等を安全と両立させること、すなわち功利の原理を実現する場が協同組合である。だから協同組合主義と経済理論とは彼の『社会科学』の二大構成要素であるとはいえ、前者が主、後者が従である。そして両者を体系的に『社会科学』として統一する役を演じている功利主義は所有の安全と分配の平等という消費者の見地を表明したものである、——『社会科学』の俗流化。

正しくは、社会科学は協同組合主義ではなくて経済理論が首位におかれ、協同組合主義が従属的位置を与えられ、その支柱としては功利主義のような消費者的原理に替って労働価値論にもとづいた資本蓄積論のごとき生産論的原理が採らるべきであろう、——社会科学の生産論的体系化。

さらにタムソンは社会の歴史を力とサギの制限による「安全」と「平等」の量的増大から解釈した。歴史の消費者的解釈。従って野蛮時代から封建時代、暗黒時代を経てさらに産業時代への歴史的発展は個人の安全と平等に對

する本能的希求という心理的な主観から把握されて、発展の必然性は見失われている。自由競争社会から共同社会への移行もまた、同じ主観的動機から望まれているのであって、知識の普及にともなうてより容易になる説得 Persuasion と理解 understanding によって達成される。ということとは、つまり彼には歴史は説かれていたが歴史観が欠けていたといえよう。

彼は歴史を安全と平等の景的増大を規準にして把握しようとした。経験主義的には或はそういうこともできよう。しかし、安全とは所有の安全をいい法律概念である。平等は分配の平等であり経済概念である。そしてこの両者は生産関係によつて規制される。従つて彼はさらに生産関係にまで分析のメスをふるうべきであつた。生産関係の解剖がなされて初めて歴史は必然性の論理を獲得する。歴史の生産論的解釈の重要性。

最後に、「社会にとつて重要なのは富の単なる所有ではなくて、その正しい分配である」(“Inquiry,” p. ix)と述べているように、彼が分配の問題に主力を注いだことは“An Inquiry into the Principles of the Distribution of Wealth”という主著の標題によつても明らかである。労働価値論を採りつつも、彼の分析の対象は資本制生産商品生産ではなくて、富の「正しい」分配であつた。正しい分配とは最大多数の最大幸福―功利の原理を実現する分配、つまり平等な分配のことである。このような消費者的視点が生産を幸福の増大に還元し、『社会科学』を『道徳科学』Science of Morals に昇華してしまふ。

なるほど、先学リカードも同様に『原理』の序文ですべてに「この分配を左右する諸法則を決定すること、これが経済学の主要問題たるものである」と分配論の重要性を指摘している。そして彼は価値論から『原理』の研究をはじめている。価値を投下労働価値論から把握する限り、価値の形成は生産論的立場から考察されざるをえない。¹⁾

リカアドオの経済学体系の正統性はその立場がいちじるしく生産論的であることによる。タムスの所謂『社会科学』が逆に生産論的体系をとった時、それは科学的社会主義への発展が約束されるであろう。

タムスの『社会科学』体系に望むべきは消費者的立場から生産論的立場への転換、すなわち古典派経済学の批判的継承である。

(1) 岸本誠二郎「リカアドオの経済学体系」、『経済論叢』第七八巻、第五号）参照。

社会主義思想史上のタムスの位置づけは、空想社会主義から科学的社会主義への過渡期におかれることは諸家の一致した意見である。しかし、これは彼が科学的社会主義の理論的先駆者であることを決して意味するものではない。タムスの表現や思想には断片的にみればマルクスを予想させる個所が処々に見受けられる。とはいえ、体系的にみた場合、生産視点からなくて流通視点からする俗流的把握という点で、タムスの社会主義思想はマルクスのそれよりも、J・S・ミルのそれによりいっそうの親近性をもっている。

以上によってタムスの『社会科学』の全体系を伝えることができ、あわせて彼の「俗流」社会主義者としての位置づけが論証しえたとすれば、本稿の目的は一応果されたことになるであろう。